

## + 5 0 【せんゆう】

村のはずれに、新しくできた赤ちょうちんがあります。

仕事一筋の大工だった留吉（とめきち）さんが、足に大怪我をして大工ができなくなったので、赤ちょうちんを始めたのです。

夜おそくまでやっているの、夜おそくまで居座る常連客がいます。

ある夜の、常連客みんなで車座（くるまざ）になって、するめ肴（さかな）に酒をのみ、各々の幽霊話で盛り上がったことがあったそうです。

皆ひととおりの、自分が見たことがある幽霊、あるいは幽霊らしきものの話をしたあとです。

「幽霊ってやつは、みな能無しじゃ。うらめしや、しかいわん」

とだれかがいうと、

「すくなくとも、学者や芸術家の幽霊ってやつは、きいたことありゃせんな」

とだれかが続き、

「知恵のあるもんは、幽霊になんぞならん。あの世でも考えごとしとるからのう」

とだれかがいって、皆で大笑しました。

すると、一人だけ笑わなかった若者がいて、

「それがじつは、ぼくは学者で芸術家の幽霊にであったんです」

といったのです。

若者は続けます。

「であったのは大山の奥の奥。老人でしたが、その容姿その物腰その声、じつに高貴というしかない幽霊でした。ぼくはその幽霊を【せんゆう】と名付けました。戦友ではなく、仙人の幽霊で【せんゆう】です。【せんゆう】は、自作の詩の数々を朗読してくれました。

猿の音は川辺に絶えて

人声は霧に消え去る

年経し鼻人語を語り

深山のすだまは昼も行き交う

などなど、他にもたくさん」

皆は真剣な顔で、若者の話をきいていました。

「それは、お手柄（てがら）じゃのう」

「わしもその【せんゆう】なら、あってみたいのう」

「それから【せんゆう】は、どうしたのかのう」

皆の問いに、若者は微妙に笑って、

「もちろんぼくは【せんゆう】の教えを請いたいと、お願いしたのですが、【せんゆう】いわく、そういってもらっただけでありがたい、というなり木々の蔭に消えてしまって、靄（もや）ばかりがもやもやと立っていました」

そこまでいうと若者は、皆に一礼して赤ちょうちんからでていきました。

そしてそれきり戻ることはなかったのです。

あとで皆がそれぞれに確かめたら、その若者を知るひとは一人もおりませんでした。

皆がそれぞれ、きっとあのひとのこどもか親戚だろう、きっとあのひとが連れてきたのだらうと、おもいこんでいたのです。

「なんじゃ、あいつが幽霊じゃったのかい」

「それにしては、顔色のいい幽霊じゃったのう」

「【せんゆう】とはいかんが、青年の幽霊で【せいゆう】かのう」

皆は例によって赤ちょうちんで、こんどは若者の話をして盛り上がったそうです。

この話はもちろん懐爺にも伝えました。

懐爺は、きいているときも、きいたあとも、ひたすら微笑んでいるだけでした。